

3,983名が志願

2013年度県内公立中高一貫校入学者選抜を振り返る

開校5年目の県立中等教育、開校2年目の横浜市立南高校附属中、3校あわせてわずか「480の指定席」をその9倍近い3,983名の小6生が目指しました。県内小6生の5%弱が志願したことになります。

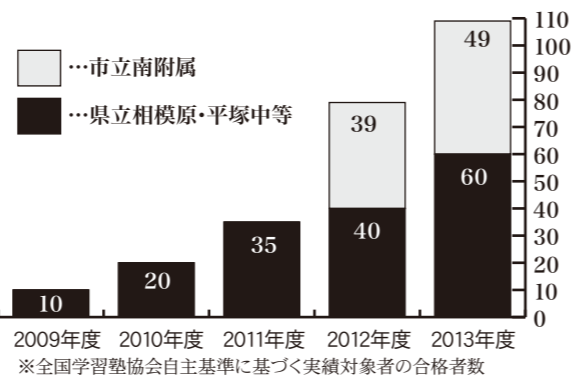
1 2年連続県下トップ!

※3校計・南附属中合格者数において2年連続
 県立中等には計60名、市立南附属に49名が合格

今年もCG啓明館からもCG中萬学院からもCGパーソナルからも合格者が多数出ました。私学との併願や公立中高一貫校のみの受検、あるいは個別指導で集団指導で、と生徒それぞれのニーズに合わせた対策が行える中萬学院グループならではの、といえます。CHUMAN生はすばらしい健闘を見せ、平塚中等では定員160名のうち約3人に1人が、南附属でも1クラス分以上がCHUMAN生です。

右のグラフは社団法人全国学習塾協会の定める実績対象に基づく合格者数の推移です。入試から逆算して3カ月以上継続して受講していること、など基準が定められています。協会に加盟していない塾は、独自の基準で合格者を公表しています。

県内公立中高一貫校
 2013年度合格実績 3校計109名 各塾中No. 1
 No.1 県立平塚中等教育学校 50名 (7・43・0)
 No.1 市立南高校附属中学校 49名 (5・41・3)
 県立相模原中等教育学校 10名 (1・8・1)
 ※()内はCG啓明館・CG中萬学院・CGパーソナルの合格者数



2 じわじわと平塚中等、2年目も高倍率南附属。

国私立中学受験者も併願先として定着

今年の出願状況は右のとおりです。県立平塚中等は2年目以降確実に志願者を増やし続けています。また動向が注目された市立南高附属中も女子で900名を超える志願者を集めるなど高倍率を維持しました。公立中高一貫校3校全体では男子が1,727名(志願倍率7.51倍)、女子が2,117名(志願倍率8.47倍)でした。右表は受検者の推移です。相模原中等・南高附属中2校では欠席・取り消し者数が123名を数えます。他校合格を得た私学併願者がその大半を占めます。これに合格発表後の取り消し数(非公表)を推定すると、今年も志願者のおよそ5%弱が私学に手続きしたものとされます。言い換えると志願者の大半は公立中高一貫校を第一志望とする生徒たち。さらにCG中萬学院からの92名の合格者は私学対策をしていない生徒たちです。

「私立中学受験の勉強をしていないと受からない」といった我田引水的な話に惑わされることなく、自信をもって受験勉強に臨んでほしいと思います。

倍率の推移	平塚中等教育		相模原中等教育		南高校附属中学	
	男子80名	女子80名	男子80名	女子80名	男子80名	女子80名
志願者 《2012》 《昨年》 (一昨年)	407 《400》 (357)	488 《481》 (436)	703 《754》 (683)	791 《811》 (802)	686 うち学区外25 《815》 うち学区外38	907 うち学区外51 《952》 うち学区外24
志願倍率 《2012》 《2011》 (2010)	5.09 《5.00》 (4.93)	6.10 《6.01》 (5.91)	8.79 《9.43》 (8.08)	9.89 《10.14》 (10.03)	8.58 《10.19》	11.34 《11.90》
欠席 取り消し 《2012》 《2011》 (2010)	6 《5》 (10)	9 《7》 (15)	30 《33》 (26)	20 《27》 (28)	33 うち学区外1 《26》 うち学区外4	40 うち学区外4 《45》 うち学区外2
受検者 《2012》 《昨年》 (一昨年)	401 《395》 (354)	479 《474》 (431)	673 《721》 (656)	771 《784》 (766)	653 うち学区外24 《789》 うち学区外34	867 うち学区外47 《907》 うち学区外22
競争率 《2012》 《昨年》 (一昨年)	5.01 《4.94》 (4.81)	5.99 《5.93》 (5.73)	8.41 《9.01》 (7.78)	8.41 《9.80》 (10.01)	9.33 合格70 うち学区外6 《9.86》 合格78 うち学区外3	9.63 合格90 うち学区外6 《11.34》 合格82 うち学区外3

※受検者・志願後、取り消しや欠席をせず適性検査・グループ活動を受検した人数。グループ活動受検後の取り消しは非公表のため、実質倍率として扱います
 ★…南高附属中は1次選考で男女各70名を選考し、2次選考で20名を適性検査得点上位者から決定します。志願倍率は便宜上80名定員でそれぞれ算出しています。実合格者に対する志願倍率は男子9.8倍、女子10.08倍となります。

3 Topics

「対策しがいい」のある県立、「辛抱強く」の市立。

「適性検査らしい」県立スタイル。記述は150字まで拡大される

5回目となった県立中等教育適性検査の、今年のオープニング問題は絵地図。条件を整理し筋道を立てて考え、解答を導く力が問われます。対策学習を積んできた生徒にとって安心できる出題です。全体を通して「実践的算数力」が問われる手応えのある問題。今年も教科横断型の適性検査らしい「良問」でした。昨年との違いを挙げると、毎年出題される立体図形に関する問題の難度が高かったこと、IIの問3は国語的色合いが濃かったことなどが挙げられます。また、昨年は90字以内だった自由記述が、今年は700字程度の説明文の内容を踏まえたうえで自分の意見を150字以内で記述する条件作文となりました。検査として独立していた作文が日程の軽量化のため昨年からなくなりましたが、その代わりとして受検生の表現力を測る問題の一つとなっています。

市立のIIは「ねばり強く試行する」

一方、市立の適性検査問題。今年もIは国語、IIは算数・理科、IIIは社会と、教科的色合いの濃い出題であったと言えます。また豆電球がつく配線や聖徳太子など歴史上の人物を答えさせる問題など、小学校教科書レベルの知識は最低限もって入学してきてほしい、というメッセージを今年も問題からうかがえます。

今年の話は適性検査IIです。大設問2では1から9までの数字を使っていろいろな計算をしますが、4題ある小問は後半に行くにつれてねばり強く作業・計算、「試行」をしないと解答にたどり着けない問題です。右の解答例からもそのたいへんさが見て取れます。大設問が5つあるので、ここで時間を取り過ぎると最後まで解き切れません。全問解き切った受検生はそう多くはないようです。

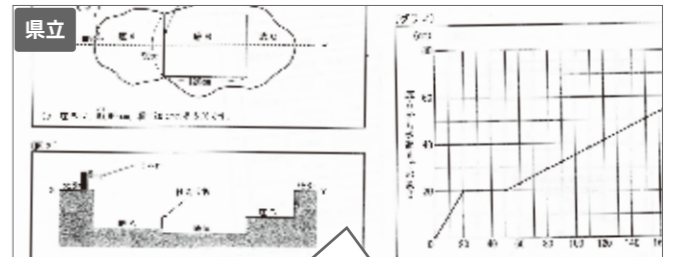
「知識の再生力」から「知識の活用力」

入試問題を解く。それは覚えた知識を解答用紙に「再生」していくこと、というイメージが多くの方にはおありだと思います。確かに知識は必要ですし、新学習指導要領では3割以上増えました(以前に戻ったというのが近いですが)。しかし、今問われるのは知識の再生力だけではなく、その知識を使って課題を解決する「知識の活用力」です。その好例が適性検査です。この流れは公立高校新入試問題でも、また進行中の大学入試改革にも共通します。昨年8月末の中央教育審議会答申では「高等学校から大学への移行において、単に知識を再生する力だけではなく、広く汎用的な能力を問う」とあります。適性検査対策の学習はまさに学力のトレンドと言えるでしょう。

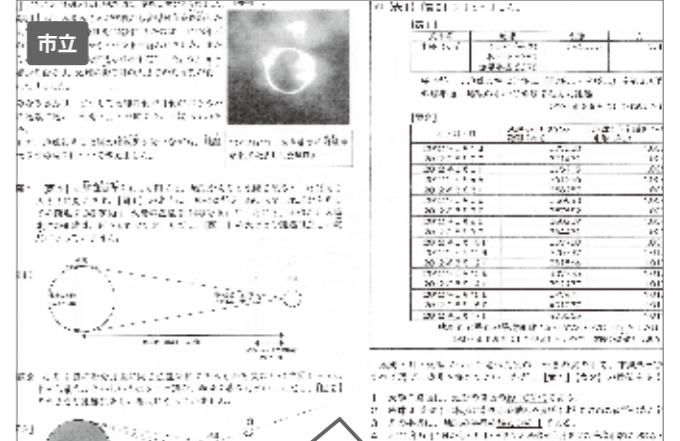
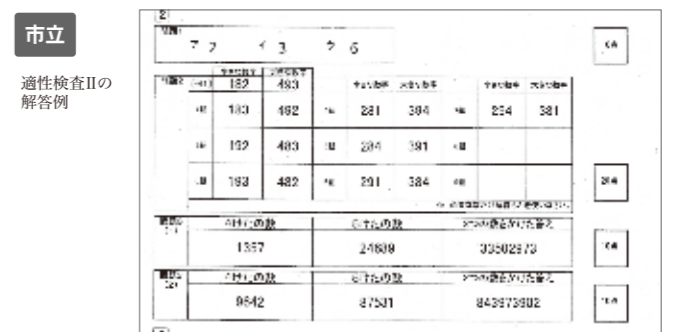
今年CHUMAN生の頑張りとその成果はすばらしいものでした。これから受検に臨む生徒たちも、知識を使って作業する、表現することを楽しめる生徒に育ちそして笑顔の春を迎えられるよう、努めていきます。



県立
 Iは3つの資料を照合して2つの施設の種類と色を答えます。答えにいたるまでの手順が入り組んでおり、理屈で物事を考える力が必要です。



県立
 2つの図とグラフを利用して、池にためたときの水の量や深さ、底の面積を計算して求めます。毎年出題される立体図形としては難度が高めでした。



市立
 昨年の金環日食をテーマに(写真も南附属で撮影したもの)していますが、単に知識を問うのではなく、2種類の資料を読み取ったり計算したりしながら正答を導く問題です。表にある大きい数字も適性検査によく見られます。

各設問の講評は中萬学院ホームページに掲載中。適性検査問題のダウンロードもできます